

第33回 深田祭

1971(昭和46)年3月21日、茅ヶ岳山頂直下で亡くなられた深田さん。日本山岳会副会長を務め、発足間もない自然保護委員会の委員として活躍。鎌倉文士としてよりも『日本百名山』の著者として有名になってしまった深田さん。山麓の遅い桜を愛でながら深田久弥を偲ぶ碑前祭に参加します。

日時：4月20日(日)午前10時 JR中央線蕪崎駅前

前に集合

行程：臨時バス(10時15分発)に乗車。

深田記念公園下車(約20分)

山麓トレッキング 記念公園～女岩往復(約3時間)

13時30分より深田祭に参加。献花、献杯等。他に豚汁、麦茶無料コーナー。地元特産品販売有り。

帰路・臨時バス蕪崎駅行 最終16時(予定)

参考：新宿6時22分(中央特快) 高尾7時5分着

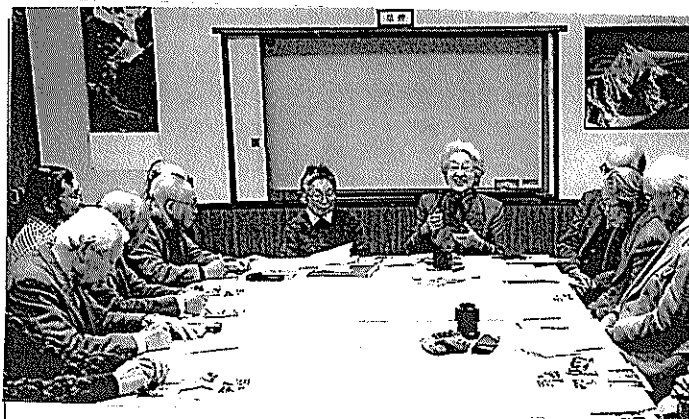
高尾7時26分発(小淵沢行) 蕪崎9時46分着

申込：4月16日迄に松本03-3326-2892まで。

緑爽会総会予告

日時：5月22日(木)13時～ 総会

講演：吉田理一会員「越後駒ヶ岳駒の小屋管理人体験談」



対談「お茶の水ルーム時代の思い出」終わる
2月27日(木)の午後開催された山口節子・山本良子両会員による標記の対談は、たいへん好評だった。戦後間もなく日本山岳会は当時の岸体育館敷地内に山小屋風のルームを建てたが、机を囲んで会議をすれば、壁に添って通り抜けるにも体が触れ合うほどの狭さだった。そんな中へ入会した山好きの娘たちは、先輩たちから可愛がられた。これまでの令夫人・お姫様の女流登山家と違って、自立した自分の意思で入会した彼女たちを女性登山のリーダーとして養成しようと、大学山岳部出身者による冬山やスキーの訓練もきびしかったと言う。昭和20年代、平和な時代になって全てが新しく始まる時期の日本山岳会を知る女性たちの証言は、貴重なものだった。いずれ記録を掲載したい。



緑爽会報 NO.126

14年 3月25日

発行

公益社団法人

日本山岳会 緑爽会

☎ 03-3261-4433

事務局 松本恒廣

夏原寿一 近藤雅幸

近藤 緑 川口章子

渡部温子 福原好子

第33回

深田祭によせて

里見清子

1971(昭和46)年3月21日、彼岸の中日に、深田久弥は日本山岳会の友人たちと茅ヶ岳(1704m)に登山した。地域の水源でもあるコースの中で唯一の水場女岩を過ぎて急坂となり、ブナやコナラの林の中、この季節雪がなくても霜解けで滑りやすい道を甲斐市(旧敷島町清川)との鞍部まで登り着き、左へ尾根を辿り小さなテラスで休憩中、仲間の一人が「この辺はイワカガミが多いんですよ」と声をかけ「そうですか」と言葉を交したのが最後だったとか。休憩した小さなテラスは頂上まで15分位手前だった。同行者の一人で山梨支部の山村正光会員が駆け下り、一軒だけ在宅だった開拓の家で電話を借りて急を知らせ、地元の白鳳会と地域の山仲間が救助隊を編成して医師と共に酸素ボンベを担いで登ったが、現地に着いた時には既に亡くなっていた。(享年68歳)

整備された現在の登山道とは比較にならない悪路の下り、体格のよかった深田久弥を救助に向いた全員が協力して慎重にご遺体を下る作業は大変だったこと、ご遺族との連絡、病院、警察など全ての手に苦労が多かったことなど、当時関わった方たちから私も話を聞いている。

深田久弥没後10年を経過して深田祭が実施された。昭和56年から地元蕪崎市、白鳳会の協力を得て実施され、今年で33回目を迎えることになる。当日は茅ヶ岳山麓の深田記念公園の記念碑前に、県内外の岳人をはじめ

め、深田クラブの会員、深田百名山の愛好家などが多数集まる。

しかし亡くなって40年余も過ぎると、深田祭のことも知らずに、たまたま当日蕪崎駅に降りたら無料バスが出るというので、それなら茅ヶ岳に登ってみようかといった人たちもいる。そんな人たちは深田久弥終焉の標柱(前記山村正光が鬼籍に入る前に木柱だと腐食するからと石柱に建て替え、永く語り継ぐよう願った)のところに花が供えてあるのに気付くと「へえ、ここで誰か死んだんだ、可哀そうだねえ」と話しながら通り過ぎていくという。

毎年、200人近い人が参集する深田祭。記念碑には「百の頂に百の喜びあり」の文字が刻まれている。深田久弥を知る人も、また初めて参加した人も仲間として迎え入れ、『日本百名山』をはじめ数々の山岳著書や小説・紀行文などを遺した深田久弥の遺徳を偲びたいものである。

晴れた日には碑に映る茅ヶ岳の姿が、碑前に集う人々の安全登山を見守っているようだ。

(山梨支部自然保護委員)



深田祭で記念碑の前に立つ筆者(2009年)

奥多摩に生きる

田邊 壽

一、奥多摩の入口「山と川の走る町・青梅」で生まれました……

私は一九三一年の秋、町の何処からも奥多摩の見える町に生まれ奥多摩と云うものを初めて意識したのは、小学生になり赤いフンドシをしめて多摩川に飛びこんだ時からだった。

中里介山の『大菩薩峠』という本で裏宿七兵衛という泥棒が甲州街道の裏街道を青梅宿から一走りして山梨を往復したという話や、親父が若い頃雲取山に登るのに二俣尾までしか走っていなかった青梅線で雲取山を歩いて往復した話など、親父やおふくろに抱かれてゆりかごで揺られる様に何時か奥多摩というものに抱かれて育った。

二、奥多摩の本仁田山(二二四四)で初めて山に登る……

それは全く思いがけないことで私は初めて奥多摩に向きあった。

立川高校に学んだ或る日、氷川(今の奥多摩)から同じ立高に通った友人に秋の一日裏山へ登ろうと誘われた。

美しいスキの穂が日光にまぶしく光っていたから秋の日だったろう。私はその友人と奥多摩の一つの山に登った。

それは本仁田山だった。そして秋の奥多摩の一日、何かが私の胸に入った。

次の日は学校へ行き地歴部山岳班に入った。

これまで全く登ったことも見たことも無い山が何故か私の胸にとびこんだ。

その日から私は山にとりつかれた。

立川高校で山岳班を山岳部に昇格させ、初代部長になった。

山登りは良い山と良い指導者に会うかどうかが深みにはまるかどうかの分れ路になる。私の山は一〇代後半、多感な時に学校を出て先生になったばかりで山好きの二人の先生に出会った。この先生に出会い、本仁田山に登らなければ私の山は深みには入らなかったと思う。

三、より高くより厳しく

こうして多感な高校生が終戦をはさんで山登りを続け、一九五〇年慶応大学に進み山岳部に入った。

そしてここで私の山登りは大きな世界へ引きずりこまれた。慶応大学山岳部で私の山登りは奥多摩から一気に広がった。

その頃世界の登山界も激動の時代・シエトルム&ドランク(疾風怒濤)の時代を迎えていた。

一九五三年私が二二歳の時、日本山岳会は八〇〇峰のマナスルに登山隊を送った。その中にルーム(慶応山岳部)の先輩も三田さんを隊長に辰沼、加藤、山田の先輩が隊の中核として活躍していた。

そして私は緑爽会報に「青春の大縦走」として宮下さんが書いた雪洞による剣から西穂への大縦走の縦走隊のメンバーとして参加していた。

育った奥多摩をかえり見るよりヒマラヤを横に見て登っていた。

そしてこの年遂に英国隊はエレベストに登り世界のアルピニストの夢をくだいた。

同年、京大のアンナプルナ遠征IV、ドイツのナンガパルバット、イタリアのK2、オーストリアのチョーユー・ガツシヤールムII・ブロードピーク、フランスのマカルI、英国のカンチ……とエレベスト登頂から5年の間に八〇〇峰九座に登られるという激しい時代となった。

こうした中で私も慶応の山岳部員として次第により激しくより高く登るアルピニストとして奥多摩はもとより八ヶ岳さえも夜行列車の夢と捨てて、ひたすら北アルプスに向う時を過ごした。

そして山への思いは次第にヒマラヤへと凝縮しようとう一九五九年JACのヒマルチュリ登山隊に選ばれ初めてヒマラヤの氷を踏み、翌一九六〇年二八歳の時慶応大学創立一〇〇年を記念するヒマラヤ登山隊のメンバーとしてヒマルチュリの頂に立った。

三、At Last 奥多摩

ヒマルチュリに登って以来、登山としてヒマラヤは宮下さんのエレベスト南西壁・慶応のカルシオン峰登山隊に参加したが、その他ヨーロッパアルプス、アラスカ、ノルウェーの山々を登った。

何処の山々も心に残る良い山だったが、体力も気力も沈静化するうちに私の心は森と水の美しい日本の山に次第に還った。

とりわけ鳥海山を中心とする東北の森と山に惹かれることが多くなり、同時に故郷の奥多摩の山々に心が還って来た。

足を痛め登れなくなり山への想いは下手な絵となり奥多摩の山々へと傾斜した。

先月末、私は病の妻と二人で故郷の青梅の町から少し離れた福生の介護マンションの五階に遂の棲家を定めた。

窓を開けると左から丹沢、富士山、そして

奥多摩から秩父に連なる山並みが一望のうちだ。

真つ白で高い富士山も良いけど残雪と枯木の低い山々も良い。

結局、山は皆んな良いということだ。近くには緑爽会の山の友も居て美味しいお茶をたててくれる。

外に出れば眼一杯の奥多摩の山達。「たまには一杯やろう！」と呼びかけてくる

「下手な絵は描いているか！」と語りかけてくる

山は私の胸のうちを写して大らかだ。こうして考えるに

山は激しくぶつかれば強く受けてくれる山は心弱くもたれば易しく抱いてくれる山は見ているだけでも良いもんだ。

(二〇一四、三、一一)

友人の皆様へ

2014年2月26日 櫻のつぼみがまだ残雪の中に在る時、私達夫婦はこのマンション5階の506号室に移りました。丹沢・富士山・奥多摩・秩父の眺めと共にコーヒー一杯位は差し上げられる部屋です。

JR 拝島駅北口より歩いて5分の所ですので奥多摩にお越しの際は、お立ち寄り下さい。お電話頂ければご案内申し上げます。 敬具

2014年3月 田邊 壽
マリ子
チ口(猫です)

新住所:〒197-0003 福生市熊川1403-1 ゆいま〜る拝島506号
電話:090-7417-7909
FAX:042-530-3766
E-mail:himalaya@qf6.so-net.ne.jp

テラスより 丹沢・富士・奥多摩・秩父

なぞの多い玉川上水

西谷 隆 亘

江戸開府当初、家康は家臣・大久保藤五郎に命じて、手近な小石川目白台の下辺りから小石川上水道を敷かせた。逐次、給水範囲を拡張して、三代將軍家光の頃、寛永六(1629)年(武家諸法度の改訂)までには、小石川上水を基礎とし、井の頭池の湧水を主水源とする神田上水の体系はでき上がっていたものと思われるが、詳細はわからない。

江戸市中の水道は、当初、小石川上水・神田上水(神田・日本橋方面へ)、玉川上水(後述)、玉川上水から分水される四上水、すなわち、本所上水(別名亀有上水、万治二(1659)年)(本所方面へ)、青山上水(万治三(1660)年)(赤坂・麻布・芝方面へ)、三田上水(寛文四(1664)年)(芝・麻布方面へ)、千川上水



羽村の堰 ここから多摩川の水を取水して江戸に送った(明治初期の写真)

(元禄九(1696)年)(本郷・下谷・浅草方面へ)と六系統で墨田川以西の地域では自然流下できる範囲に給水、水源で見ると神田上水系統がほぼ四分の一、四分の三が玉川上水系統であった。墨田川以東の地域(江東地区)には、別の水源・元荒川の溜井から水路を設けて導水されていた。最盛期の江戸は世界一の大都会で、人口は100万人を突破していて、約6割が水道の恩恵を受けていたと思われる。寛永十二年(1635)の武家諸法度の改訂による参勤交代の制度の確立に見られるような政策がとられるようになってから、江戸は当時の世界的に見ても大規模な都市として、急激に人口も集中するところとなり、従来から湧水や溜池などで賄っていた上水は、水源地帯が武家屋敷などの住宅地に入ってしまった、新たな水源が必要になった。

四代將軍家綱になつて間もなく、玉川上水計画実施の断が下された。当時の記録文書は残存しない。幕府普請奉行上水方道方であった石野遠江守広通の著した『上水記』(正徳五年(1715))と『新編武蔵風土記稿』などの文書を総合して、『東京市史稿』は玉川上水成立の経緯を次の様に推論している。

玉川庄右衛門・清右衛門の兄弟の父親が武州羽村から江戸まで十三里の水盛り(測量)をして、図面を付けて幕府へ願ひ出た。六日間かけて実地検分の後、玉川兄弟に七千五百両で上水道普請に取りかかることが申し渡された。実際の御入用金は六千両で、途中で資金不足に陥り、三千余両の私費を用立てたと玉川家は上申している。普請当時の記録がなく、五十年以上昔の話で真相は定かではない。羽村から武蔵野台地の上をほぼ西から東へ約43(42.738)キヤム、高度差約92以下り、新宿・大木戸まで掘り進められた水路は、

承応二(1623)年四月四日(十一月十五日までの約八ヶ月(閏六月を入れて248日)の短期間で掘削され、市中へは暗渠で木樋や石樋などで配水され、承応三(1624)年六月頃までに完成された。現在では久我山からは暗渠となり、途中から公共下水道となっている。新しい水源が何故、多摩川に求められたのか、当時の江戸周辺地域の状況と玉川上水路の地理的・技術的な面を見よう。

江戸時代には干拓による新田開発が各地で盛んであった。江戸周辺は沼沢地であったため、安定した生活ができるよう、インフラ(生活・産業基盤)整備が行われている。

往時、利根川と荒川は埼玉平野で合流して、東京湾に注いでいた。荒川の西側を入間川、利根川の東側を渡良瀬川、鬼怒川が流れていて、それらは別々の川であった。利根川と荒川の二つの河川を分離して、利根川と渡良瀬川を東の鬼怒川筋に付け替え、荒川を西の入間川筋へ付け替える普請が江戸時代初期に行われ、旧利根川筋は古利根川、旧荒川筋は元荒川と呼ばれ、元の川筋は中川となり、荒川、利根川両大河の間の埼玉平野の排水河川の役割を担うことになり、沼沢地であった埼玉平野は農耕地と化した。利根川の東遷は玉川上水の工事が始まる頃にほぼ完成し、東北から江戸に向かう廻船を銚子から利根川に入れ、江戸川経由で東京湾に至る、外海を通らない安全な航路(内川廻し)ができた。一方、荒川の西遷工事は玉川上水完成後もしばらく続いた。これが当時の河川状況である。水不足となった江戸で近郊から水源を求め得る河川は、多摩川しかなかったであろう。

八代將軍吉宗の時、六系統であった上水の中、神田・玉川両上水を除く、本所、青山、三田、千川(後述)の玉川上水の分水である

四上水が享保七(1722)年突如、儒官室鳩巢の「地下水脈が大火の原因となる」という建議に基づき廃止された。真因は不明である。

残された玉川上水の給水範囲から見た玉川上水の役割は次のようなものである。①武蔵野台地の生活用水と灌漑用水 ②四ッ谷を経由して、半蔵門から江戸(現・皇居)の生活用水、雑用水および内堀と外濠への給水 ③江戸城西南部の大名屋敷への給水 ④武蔵境で分水される千川用水へ廻して、本郷台地・駿河台池の大名屋敷への給水。

江戸市中の庶民の生活用水の供給ではなく、江戸城とその周辺の大名屋敷への給水が優先されていることがわかる。玉川上水は建設当初の記録がなく、謎にまつまれている部分が多い。(了)

(羽村在住・自然保護委員)

花と水のまち

羽村に住んで

西谷 可江

此の度の二月の大雪もやっと解け、多摩川の土手の犬ふぐりは、瑠璃色の星を散りばめ、上水沿いの桜は、寒い川風に吹かれながら日毎に薄紅の丸い蕾を膨らませている。

羽村に転居して私共は三十六回目の春を迎えた。「玉川上水の取水口があり、我が家から二十分も歩けば多摩川に至り、自然に恵まれたこの地が気に入って」の、隣町福生からの転居であった。我が家の傍には、広い畑が広がっていた。二階の窓からは御岳山、大岳を望むことができる。地元で「向う山」と呼ばれる浅間山のある草花丘陵の後方に、富士の

頂が見える。畑の傍に新興多摩街道が通じて以来、畑は住宅地となり、僅かに残る畑の隅の一本の桑の木に、長閑だった転居当時を懐かしく思い出す。

桑の木といえば、今はこの辺りでは殆ど見かけることはないが、羽村は嘗て養蚕業が盛んであった。今の町からはその片鱗も窺えないが、小正月に郷土博物館に飾られる繭玉や展示されている諸道具で往時を偲ぶことができる。

昭和三十一年に施行された「首都圏整備法」によって羽村は市街化開発が進み、工業団地ができ、駅東口側は特に変貌が甚だしかった。西口も現在、ずつとずつと以前に計画された、「西口土地区画整理事業」のもとに、昔の面影はほとんど失われつつある。

羽村は、江戸の上水源となった玉川上水の水口があることで昔から名を知られていた。また多摩川が流れる「水の町」という印象が強い。私も、そのようなイメージを抱いていた。地下水を100%水源とする羽村の水は最近ペットボトルで販売されるほど美味しいし、因みに昭和五十一年度の水道料金（家事用）は全国一安く、10mあたり、最高の兵庫県家島町は三千七百五十円、最低は羽村町百四十円で、その差は二十六・七倍であった。だが、水道財政は危機であつたらしい。

しかし、昭和三十六年に町営水道ができる以前の羽村の人々は古より水に苦勞してきた歴史を持つ。羽村は多摩川の扇状地のほぼ扇頂部に位置し、六つの崖線のある段丘の町で、間坂、寺坂、堂坂など、名のつく坂が多い。崖段丘のことを地元の人々はハケ、バツケまたはボッコと呼び、畑仕事や桑摘みなどに坂を行き来した人々の日常の暮らしは乏しい水に加えて、苦勞大であつたという。変貌し、今



開発前の桑畑
(昭和30年代)
まいまいず井戸

も尚、町の様子が変わりつつある羽村。その

ような中で、水に乏しかった羽村を物語る古い井戸が現存している。駅東口傍にある「まいまいず井戸」。鎌倉時代に掘られたとか。二十七mの深さでは、流石に「掘り兼ねの井」であつたらう。小作駅の傍にある「懐古の井戸」使用されなくなつてから名付けられた。これら二つの井戸は昭和三十五年まで公共の井戸として使用された。羽村町史によれば、小作の井戸は、「渇水期になると井戸水は不足して夜明け方から競争で水汲みが始まり、時には赤ん坊のおしめも洗うことが出来なかった。風呂水は毎日替えることが出来ず三日くらいで替える家は糞沢だと非難された。普通には一週間くらいたてかえ、たてかえして、終いには湯がどろどろになつた。『その湯が肥しにはめつぼうよくきいたもんだ』と語る古者は笑つていた」とある。このエピソード一つにも当時の人々の水の苦勞がよくわかる。

多摩川沿いにある標高二百三十五mの浅間山に私は、しばしば登る。浅間山へは多摩川を渡つて右岸に出るのだが、昭和四十六年までは皆が「生活橋」と呼んでいた木製の「もぐり橋」であつた。台風で増水でもすれば橋は壊れてしまい、地元の人々の三十年來の悲願

思いもよらぬ大腿骨折でまた入院、すっかり自信を失いましたが、歌だけは無尽蔵に湧き出るのは不思議。近作を送ります。

翠柏狂歌雑詠2014 羽賀克己

・新玉の昼げは老妻が整えて兄が賜いし梅酒で祝う
・雑煮餅小さく柔らかに煮てくれる心遣いの妻に感謝す

・罵詈雑言争い絶えぬ夫婦でも妻の優しさに沁みる

・採りたての七草送るとメールあり蒲原平野の歌の弟子から

・新鮮な七草嬉しと駄作詠み愛しき弟子に返し歌する

・久方の富士山白く煌めけり表日本は今日も快晴

・門先の鉢に薄氷張りし朝梅の蕾は少し膨らむ

がやつと叶つて「羽村堰下橋」が架けられた。立派な歩行者用の大橋となり、この橋に並行して架けられた「羽村大橋」と、この二つの橋で、この辺りの多摩川の長閑だった眺めも変わった。今、郷土博物館前にあつた広い料亭跡に、老人ホームが建設中である。右岸の景観も変ることであろう。

郷土博物館の裏から浅間山に入ると、ささやかな空間ではあるが私にとつての別世界が始まる。季節ごとに咲く可憐な草花。落ち葉を踏みながら歩く小径。浅間山の上には、小さな祠のある浅間神社がある。ここから羽村の町が一望できる。眼下に流れる多摩川。遠く新宿のビル群。澄み渡つていけばスカイツリーがうっすらと。彼方に筑波山が見える。多摩川左岸には、土手に沿つて羽村で唯一の水田がある。現在は学校田として小学生の体験学習の場となり、稲刈りが済むと、四十万本のチューリップ畑となる。春は正に「花のまち羽村」である。

変わりゆく町の中を春の陽をのせて、多摩川は今日も流れている。この春もまた、私はこの地に住まう幸せを思う。

(多摩支部・羽村在住)



昭和30年頃の堰下橋

編集後記

★私ごとで編集が遅れ、3月のお花見前にお手元に届かなかつたことをお詫びします。当日の資料として役立てて頂ければ幸いです。★奥多摩と多摩川をテーマにしたこの号は、西谷可江さんのお骨折で発行できました。田邊さんはじめ快くご執筆下さった方々にお礼申します。K